

コミュニケーションと行為：ルーマンの オートポイエーシスのシステム理論への一ア プローチ

TOKUYASU, Akira / 徳安, 彰

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / 社会労働研究

(巻 / Volume)

34

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

203

(終了ページ / End Page)

233

(発行年 / Year)

1987-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006964>

コミュニケーションと行為

—— ルーマンのオートポイエーシスのシステム理論への
アプローチ ——

徳 安 彰

1. はじめに

およそ社会的な現象は、複数の人間の相互関係から成り立っている。これはだれもが認める自明の事実である。だが、相互関係やそこから生じる社会的な現象は一体どのように記述できるのか、また相互関係から社会的な現象が生じてくるメカニズムは一体どのように説明できるのか。この問題に対する答は千差万別であろう。社会学における理論的営為は、すべて、その答を見つけ出そうとする努力であると言ってよい。

そこではまず、複数の人間の相互関係を記述する概念をどのように規定するか、またそこから生じる社会的な現象を記述する概念をどのように規定するか、ということが問題となる。これらの概念規定のいかんによって、理論的説明の内実が大きく左右されるからである。

複数の人間の相互関係を記述する概念として、今日最も一般的なものは、相互行為とコミュニケーションであろう（古典的なものとしては、マルクスの「交通」やジンメル「心的相互作用」などがある）。相互行為の概念は行為理論から、コミュニケーションの概念はコミュニケーション理論から、とそれぞれ源泉は異なるが⁽¹⁾、どちらの概念にも共通する特徴は、相互関係を単なる外面的、物理的なものとしてではなく、人間の内面にかかわる意味的なものとして規定している点にある。だから行為理論は、行動主義が外面的に観察可能な刺激—反応の連鎖にもとづいて人間の行動を

規定することに対してつねに批判的であったし、コミュニケーション理論は、情報理論が情報量の概念によって情報をもっぱら数量的にとらえることに対してつねに批判的であった⁽²⁾。

一方、相互行為ないしコミュニケーションから生じる社会的な現象を記述する概念として、今日最も一般的なものは、社会システムであろう（古典的なものとしては、マルクスの「社会構成体」やコントの「社会有機体」などがある）。社会システムの概念は、古くはスペンサーの社会有機体説やパレートの一般均衡理論にもとづく社会理論の中に現れ、ヘンダーソンを経てパーソンズに引き継がれた。また、第二次大戦後の一般システム理論やサイバネティクスの発展も、社会システムの概念規定に大きな影響を与えた⁽³⁾。

相互行為やコミュニケーションの概念によって記述される人間の相互関係が、その基本的性格として意味的なものを中核に持つならば、そこから生じてくる社会的現象としての社会システムもまた、意味的な性格を備えているはずである。事実、パーソンズが行為の一般理論の中で意図したのは、そうした意味的な性格を持つ社会システムの成立の過程を定式化することであった。彼が、行為システムのサブ・システムの一つとして文化システムを考え、社会システムと文化システムの相互浸透によって社会システムの意味的な性格を説明しようとしたのも、そのためである。

しかし、構造—機能主義の名で呼ばれることになる彼の社会システム理論は、AGIL 図式による機能分析とシステムの均衡分析へとその焦点を移行させてしまった⁽⁴⁾。その結果、1960年代後半から噴出した反構造—機能主義の諸理論は、一方で社会システム理論における均衡の偏重を批判し、コンフリクトや形態生成という概念を前面に押し出すことで意味の問題を等閑視し（コンフリクト理論やセカンド・サイバネティクスに基づくシステム理論）、もう一方で機能分析の機械論的傾向を批判するあまり、ミクロな相互行為やコミュニケーションの世界にとどまってマクロな社会シス

テムへとつながる視点を失うこととなった（象徴的相互行為論や現象学的社会学：ただしダンカン [Duncan, 1968] やバーガー＝ルックマン [Berger & Luckmann, 1966] のような例外的試みはある）。

そこへ登場したのがルーマンである。意味構成的システムとしての社会システムというキャチフレーズによってパーソンズ理論の批判的継承をはかるルーマンは、相互行為とコミュニケーションの概念を再検討し、それにもとづいて社会システムの構成とそこにおける意味の問題を新たに定式化しようとしている。以下では、コミュニケーション概念を手がかりとして彼の理論の核心に迫り、新たな一般理論構築の可能性を探ることとする。

2. ルーマンの理論構成の論理

ルーマン理論は、かつてのパーソンズ理論がそうであったように、1960年代から1980年代にわたって大きな変貌をとげてきている。ここでは彼の理論的変遷をあとづけることが目的ではないので、近年の到達点として彼の理論を体系的に述べていると目される *Soziale Systeme* に主に依拠して、諸概念の位置づけを確認することから始めたい。

ところが、*Soziale Systeme* を読み進むと明らかになってくるのは、概念規定の方法が非常に入り組んでいるという事実である。はじめの方の章で出てくる概念は、しばしば後の方の章で出てくる概念を前提として規定され、ひとつの概念の説明は、他の諸概念への言及と関連づけによってなされている。したがってまた、理論構成の論理自体も複雑に入り組んだものになっており、容易には体系的把握を受けつけない。なぜ、かくも入り組んだ記述のスタイルをとるのか。それは、理論記述の問題が単なる用語法の問題ではなく、理論構成のためになされねばならないさまざまな選択の連関そのものを伝えるという問題だから、とルーマンは言う。そして理論記述の問題については、少なくとも次の5つの観点を考慮する必要がある、と [Luhmann, 1981 : pp. 172-175]。

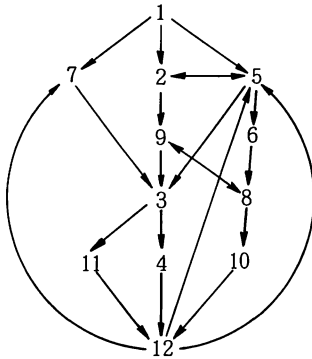
(1) 伝統的用語法とのつながり：ある対象や事象を名づけるためには、特定の概念を用いなければならない。しかし科学的研究は進歩し、変化するから、ある時点で、意味内容が変化したにもかかわらず同一の用語を使い続けるか、それともその用語を放棄するか、という問題が出てくる。同一の用語の意味が変化したにもかかわらず、伝統的、日常的な用語法に固執すると、理論の理解が不可能になる⁽⁵⁾。

(2) 言語の操作的抽象性：複雑な対象の記述は、非常に抽象的なレベルで行われる。例えば、「変数 x が変数 y に影響する」とか「縮減された複雑性」という言い方は、非常に操作的ではあるが具体的意味を欠いており、何が問題なのかということの理解を困難にする。

(3) 理論構成の直列性：理論の提示は、まず一般的視点、基礎概念、公理について述べ、そこから結論、応用、具体化へと移行する、というかたちで行われるべきかもしれない。また、個人からはじめて世界で終わる、という構成をとるべきかもしれない⁽⁶⁾。しかし、複雑な全体社会の分析という多大な要求に応える理論は、もはやそのように直列的には記述されえない。そこで、最適解のない配列とテキスト化の問題が生じる。全体社会の理論は、システム理論からでも、進化理論からでも、コミュニケーション理論からでも、意味と自己言及に関する理論からでも書き始めることができようが、どの入り口、どの出発点も説明不能な前提を背負い込んでおり、ただ書かれたテキストに沿って読むだけの人にはほとんど理解不能になってしまう。

この迷路のような理論の構図を示せば、〔図1〕のように2次元的になり、複数の読む道筋があることがわかる。そうなると理想的なテキストは、読者がどんな道筋をたどるかに応じて、さまざまな書かれ方をしなければならないということになるが、それは実現不可能な要求である。

(4) 論理的問題：社会学の対象には、矛盾としてしか記述できない現実がある。また理論は、自らを対象の一部として把握できるかたちで定式化

〔図1〕ルーマンの社会システム理論のプラン⁽⁷⁾

1. 一般の対象としての社会システム
2. ダブル・コンティンジェンシーとシステム境界
3. システムと環境
4. 相互浸透：個人システムと社会システム
5. 意味
6. 意味諸次元の図式化
7. 複雑性
8. 体験と行為
9. コミュニケーション
10. 時間
11. 分析能力と再結合
12. 自己言及

されねばならない。この問題に対して、論理学者はシステム準拠の区別によって（例えばラッセルのタイプ理論）、弁証法論者は矛盾が運動や変化を生み出すという意見によって、それぞれ対応するだろう。しかし前者は、記述される文ごとにレベルやシステム準拠の意識も動くという重大な言語問題を背負っており、後者はそれ自体が理解不能である。そこで、矛盾や自己言及をいかに記述するか、という問題が生じる⁽⁸⁾。

(5) 分析と再結合の能力の増大：科学の分析能力が増大すると、それまで統一的単位と考えられていたものは、より下位の諸単位の関係として再把握されるようになる。一方、分析レベルに対応して再結合能力も増大し、創発性、進化、システムといった概念が生まれてくる。科学的言明は今や、関係（相関関係や共変関係）についてなされる。ある変数は別の変数が変わるとどう変わるか、どのような条件のもとでこの変数間関係は成立するか、と。そこで、言語的手段によって複雑な全体を同時的に表現できるかどうか、が問題となる⁽⁹⁾。

こうした問題との格闘の中で書き上げられたのが、*Soziale Systeme* である。しかしこの本は、問題を克服したと言うよりも、むしろ問題を体現しているというべき構成になっており、それが理論の全体像を把握するこ

とを著しく困難にしている。ルーマン自身の言葉を借りれば、

理論構成はしたがって、ハッピー・エンドのハイウェイというよりはむしろ迷路に似ている。この本のために選ばれた章だては、確かに唯一可能なものではなく、同じことは、各章のテーマとしてあげられている概念の選択についてもあてはまる。専門領域を越えてシステム比較のためにどの概念を導入し、どの概念を導入しないか、また理論史的素材の参照はどんな場合に重要で、どんな場合に重要でないか、という問題についても、私は別の決定を下すことができただろう。同じことは、論点先取や相互的指示によって理論の非線条的性格に注意がむけられる程度や、必要不可欠な最低要件の選択についてもあてはまる [Luhmann, 1984 : p. 14]。

また、概念の問題についても、次のように述べている。

ほんのわずかの概念を文献から取り出し、先行する意味解釈の批判的検討によってそれらを定義し、それによって概念の伝統の文脈の中で研究を行おうとするような一般の理論構成とは異なり、以下では有用な概念の数を増して、それらを相互連関的に決定するよう努めねばならない。これは、意味、時間、出来事、要素、関係、複雑性、コンティンジェンシー、行為、コミュニケーション、システム、環境、世界、予期、構造、過程、自己言及、閉鎖性、自己組織化、オートポイエーシス、個性、観察、自己観察、記述、自己記述、統一性、反省、差異、情報、相互浸透、相互行為、全体社会、矛盾、コンフリクトといった概念によってなされる [Luhmann, 1984 : pp. 11-12]。

実に概念の洪水とでも言うべき様相である。彼の複雑性概念を自己適用して言えば、こうした概念決定は他の概念決定の可能性からの選択である。すべての概念を他のすべての概念と結びつけることは困難なために優先的なラインを設定することになるが、それによって他の組合せの可能性が排除されるわけではない。

理論を構成する諸概念が、複雑な相互連関のネットワークの中にあり、しかもそれぞれの概念がゼマンティックとしての独自の歴史を持っている、という言わば3次元的なものであるにもかかわらず、それらを1次元的な線条性の中で表現することは、確かに困難である。その理論を読み解き、検討しようとする場合も同様で、ルーマンの格闘の産物を再び平板な線条性に還元することのないよう留意すべきである。しかしその上でやはり、端緒を見つけなければならない。

3. オートポイエーシスのシステム概念

まずシステムの概念から始めよう。

ルーマンはかつてシステム理論の発展を、(1) 全体と部分図式、(2) 均衡理論、(3) 開放システム理論、(4) サイバネティクスのシステム理論に分け、自らを(4)として位置づけ、アッシュビーのシステム理論を一般化するかたちで理論構成を試みた⁽¹⁰⁾ [Habermas & Luhmann, 1971: 訳 pp.7-8]。しかし *Soziale Systeme* では、(1) 全体／部分—図式 (閉鎖システム)、(2) システム／環境—図式 (開放システム)、(3) 同一性／差異—図式 (オートポイエーシスのシステム) というパラダイム転換の中で、自らを(3)として位置づけ、マトゥラーナやヴァレラのシステム理論を一般化するかたちで理論構成を試みている⁽¹¹⁾ [Luhmann, 1984: pp.20-27]。

オートポイエーシスのシステムとは何か。まず、ルーマンが依拠しているヴァレラやマトゥラーナの定義を見てみよう。

オートポイエーシスの組織とは、構成要素産出ネットワークによる統一体であり、その構成要素は、(1) 自らを産出した同じ構成要素産出ネットワークに回帰的に参与し、(2) 自らが存在する空間において統一体としての産出ネットワークを実現する、と定義される [Varela et al., 1974: p.188]。

オートポイエーシスのシステムとは、統一体として、つまり構成要

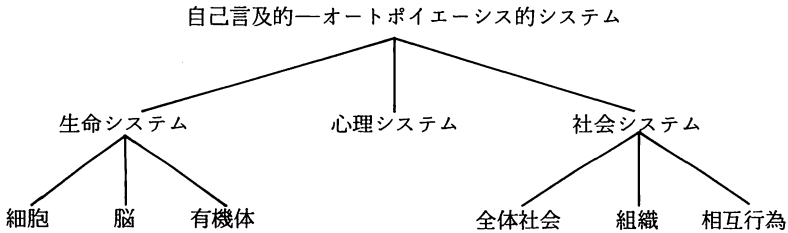
素産出ネットワークとして定義されるシステムであり、その構成要素は、自らを産出するネットワークを自らの相互作用によって回帰的に生成・実現し、また自らが存在する空間において、ネットワークの実現に参加する構成要素としてのネットワークの境界を構成する [Maturana, 1981 : p. 21]。

ルーマンによれば、1960年代に提唱された自己組織システムが、もっぱらシステム構造の産出・変更を行うものとして規定されたのに対して、オートポイエーシスのシステムは、構造だけでなく構成要素自体の産出に自己言及的にかかわるものとして規定される点が、重要なメルクマールとなっている⁽¹²⁾ [Luhmann, 1982a : pp. 367-368] [Luhmann, 1984 : pp. 24-25] [Luhmann, 1986 : p. 174]。

ところで、生物学において生命システムを規定するために導入されたオートポイエーシス理論を他の領域（特に社会システムの領域）に拡張する試みは、従来あまり成功せず、しかもしばしば誤った前提にもとづいて行われてきた、とルーマンは言う。誤った前提とは、人間の意識や社会生活は人間の生物学的生命なしには成り立たないから、心理システムや社会システムもまた生命システムである、というものである。この前提を置けば、生命システムをオートポイエーシスのシステムとして規定したのだから、心理システムや社会システムもオートポイエーシスのシステムである、という命題が三段論法として出てくるわけだ。しかしこの論法でいくと、自らを産出するシステムを回帰的に実現するように再産出される、心理システムや社会システムの構成要素は何か、という問題にただちにぶつかる。そして、生命体の細胞や神経系や免疫系までを包括的な心理学的、社会学的な現実を含めねばならないとしたら、心理システムや社会システムの場合の操作的閉鎖性とは一体どういうことなのか、ということになる [Luhmann, 1986 : p. 172]。

こうした障害をクリアする方法として、ルーマンはオートポイエーシス

〔図2〕 オートポイエーシスのシステムの理論の多段的構成



理論の一般化を提案する。従来のオートポイエーシス理論は自己再産出の様式としての生命にとらわれていたが、これを抽象化、一般化して、生命システムを特殊ケースとして含むような一般システム理論のレベルに移行させようというわけだ。オートポイエーシスを自己言及的閉鎖性によるシステム構成の一般形式と定義することによって、それ自体が生命システムでないシステムに対しても、いったん一般化されたオートポイエーシス理論を別のかたちで具体化して適用できることになる。つまり自己言及的閉鎖性を、生命システムの場合は物理—化学的な循環的因果連関として、心理システムや社会システム（つまり意味構成システム）の場合は意味的な接続と相互連関として、それぞれ具体化するのである。こうした多段的アプローチは、〔図2〕のように示される [Luhmann, 1986 : pp. 172-173]。

しかしもう一方で、ルーマンとは異なり、オートポイエーシスの概念を生命システムに限定するかたちで理論化をはかる行き方もある。例えばヘイルは、いくつかの概念を次のように区別することから始める [Hejl, 1984 : pp. 62-64]。

(1) 自己組織システム：特定の初期条件や制約条件によって、自発的に特定の状態や状態の連鎖として生じるシステム。自己組織システムは、それ自体では自己維持的ではない。(例：酵素のタンパク質分子構造，ベルーフ＝ジャボチンスキー反応)

(2) 自己維持システム：自己組織システムの循環的連鎖からなるシステ

ム。自己維持システムの中では、自己組織システムが操作的に閉じたかたちでお互いを産出する。つまり、構成要素が相互に維持しあい、それによって全体のサイクルが維持される。(例：細胞の代謝，有機体の諸器官の相互作用)

(3) 自己言及システム：構成要素の状態を操作的に閉じたかたちで組織するシステム。自己維持システムは必然的に自己言及システムだが、すべての自己言及システムが自己維持システムというわけではない。例えば、脳はその認知機能に関しては自己言及システムだが、それ自体で自己維持はできず、他の器官の助けによって維持される。

このように概念を定義すると、オートポイエーシスのシステムとは自己維持システムにはかならず(先に挙げたヴァレラやマトゥラーナの定義を見よ)、それゆえ定義上、自己言及システムでもある⁽¹³⁾。

では、社会システムはどのようなシステムであろうか。ここでヘイルは、社会システムの構成要素は生命システムとしての人間である、と規定する。ただし、生命有機体の構成要素である細胞とは異なり、人間はある社会システムへの参入とそこからの撤退が自由であり、しかも同時に複数の社会システムに参入することができる。だからどの社会システムも、構成要素としての人間を産出するわけではないし、構成要素である人間の状態をすべて組織するわけでもない。となると社会システムは、自己維持システムでも自己言及システムでもないことになる⁽¹⁴⁾。また、社会システムの自己組織過程というものがあつたとしても、それは物理—化学システムの場合のように迅速で自発的なものではなく、結果として高度に標準化された形式のシステムを形成するわけでもないから、社会システムは自己組織システムでもない。そこでヘイルは、こうした社会システムの特性を共同言及システム (syn-referential system) と呼ぶのである [Hejl, 1984 : pp. 70-76]。

この二通りの定式化の相違は、ヘイルがあくまで生命システムとしての

人間の性質にもとづいて、いわばハイラーキカルに社会システムの創発性を導出しようとするのに対して、ルーマンはそうした方法は還元主義に陥りやすいとして、あくまで意味という異なる次元においてシステムの構成要素の統一性を規定しようとする点にある。方法論的に見てどちらが根本的に正しいか、という問いに答えることは困難だが、少なくとも現在のところでは、ルーマンのやり方の方が社会学理論の伝統の中では正統派に属する。ヘイルのやり方は、首尾よく還元主義から逃れたとしても、生物学と社会学の間にある大きなギャップを多大なイマジネーションや仮定によって埋めねばならないからである。こうした本源的というよりはプラグマティックな理由により、ここではルーマンの側に与することにしよう。

ルーマンによれば、オートポイエーシスのシステムの適切な一般化は、生命システムと意味システムを共通に記述できるかたちでの抽象化とならねばならず、その前段階として、意味システムの構成要素は生命システムとは別のかたちで考える必要がある。それが、心理システムにおいては意識であり、社会システムにおいてはコミュニケーションなのである⁽¹⁵⁾。

社会システムは、オートポイエーシスの再産出の特殊な様式として、コミュニケーションを用いる。社会システムの要素はコミュニケーションであり、コミュニケーションはコミュニケーションのネットワークによって回帰的に産出・再産出され、そうしたネットワークの外部には存在しえない [Luhmann, 1986・p. 174]。

ここで初めて、コミュニケーションとは何か、ということが問題となる。だがそれとともに、コミュニケーションと行為（特に相互行為）とはどういう関係にあるのか、ということも問題となる。なぜなら、1970年代を通じてルーマンは、一貫して社会システムの構成要素は行為である、と述べているからである。

そこで以下では、まずコミュニケーションの概念について論じ、次にコミュニケーションと行為の関係について論じることにする。

4. コミュニケーションの概念

ルーマンは、シャノン=ウィーバー流の情報理論にもとづいたコミュニケーション・モデルから出発するが、その際まず、「移送 (Übertragung)」の比喩を批判する [Habermas & Luhmann, 1971・訳 pp.46-47] [Luhmann, 1984・pp.193-194]。

シャノン=ウィーバー流の情報理論にもとづいたコミュニケーション・モデルは、通信回路を人間間のコミュニケーションのモデルとして採用したものである。送信者と受信者の間にはひとつのチャンネルがあり、そのチャンネルの中を一定のメッセージ (意味) を担った一定量の情報信号が流れていく。チャンネルには途中で雑音 (ノイズ) が混入する可能性があるため、それによって情報量が減少しないように、送られる情報信号にはあらかじめ一定量の冗長度が与えられている。

ルーマンが批判する移送の比喩は、意味の担架体としての情報信号のみならず、意味そのものまでが、チャンネルの中を送信者から受信者に移送される、と考えるものである。確かに電気的な通信回路の場合には、意味の担架体としての情報信号は電氣的振動となって回線の中や空气中を送信者から受信者へと移送されるし、人間の言語コミュニケーションの場合にも、意味の担架体としての音声言語は空氣的振動となって話し手の口から聞き手の耳へと移送される。電氣的振動も空氣的振動も、送信者から受信者へと伝わり、送信者の手元には残らない (あたかも花や宝石が、送り手から受け手へとプレゼントされてしまった後には、送り手の手元には残らないかのように)。しかも移送モデルは、移送されるものが送信者と受信者にとって基本的に同一のものであるとみなしている。雑音への対応としての冗長度という考え方も、移送されるものの同一性を保証するためのものである。しかし同一でありうるのは、意味の担架体としての情報信号にすぎず、意味そのものではない。そうした事実をコミュニケーションの本質とみなすことはあまりに存在論的であろう⁽¹⁶⁾。同一の情報信号は、送

信者と受信者にとって異なる意味を持ちうるし（この事実は、通常のコミュニケーション理論では、送信者の符号化のコードと受信者の解読のコードのちがいによって説明される）、逆に意味の同一性はコミュニケーションの過程の中で初めて構成されるものなのである。

ルーマンによれば、彼の意味概念⁽¹⁷⁾から出発すると、コミュニケーションは選択的事象であることがわかる。コミュニケーションは、そのつど構成される指示の地平からあるものが選択され、他のものはそのままにしておかれる、という形式で生じる。しかもひとつのコミュニケーションは、単一選択ではなく、3つの選択、すなわち情報、伝達、理解が総合されてはじめて成立する。つまり、送信者がある情報を作り出し、それを誰かに伝達するかどうか、また誰に伝達するかを決定し、受信者が、情報そのものの選択性と伝達の選択性を区別しつつ、両者をあわせて理解することによって、はじめて統一体としてのコミュニケーションが成立するのである。この定式化の源泉となっているのは、ビューラーによる言語の3つの機能の分類（すなわち情報の選択性としての「提示」、情報伝達を選択性としての「表現」、結果としての受け取り選択の予期としての「アピール」）やオースチンの発話行為の3つの類型（すなわち発語行為、発語内行為、発語媒介行為）である。しかしルーマンは、これらの分類を機能的分化や機能的優越による類型化として捉えるよりも、統一体としてのコミュニケーションを成立させるために不可欠な選択の様式として捉えている。分化や優越は、彼の言う3つの選択の総合された統一体としてのコミュニケーションが、あらかじめ正常な事態として保証されている場合にのみ可能である、というわけだ [Luhmann, 1984 : pp. 195-197]。

では、コミュニケーションがあらかじめ正常な事態として保証されている、ということは、一体どういうことであろうか。コミュニケーションは、日常的にはさして格別の保証などなしに、正常な事態として成立しているのではないのか。これに対してルーマンは、コミュニケーションが正常な

事態として成立するという事は、実は本来はたいへんにありえない事態なのだ、と答える。このありえなさは、次の3つの要因からなる [Luhmann, 1981 : pp. 26-27] [Luhmann, 1984 : pp. 216-217]。

(1) 理解のありえなさ：コミュニケーションにおける送信者と受信者は、肉体も意識も分離し、個体化しているのに、受信者が送信者の考えや言いたいことを理解するという事は、そもそもありそうにないことである。意味は文脈依存的にしか理解できないし、文脈として第一に機能するのは受信者自身の知覚や記憶が用意したものでしかありえず、送信者の持つ文脈と一致するという保証はどこにもない。さらに、いったん誤解が生じ、それが増幅されていけば、コミュニケーションの継続はおぼつかなくなる。

(2) 到達のありえなさ：コミュニケーションが、送信者のいるその場の具体的な状況を離れて、その場に居合わせない多くの人に届くこと、つまりその意味内容が変わることなく空間的・時間的に拡大されることも、ありそうにないことである。その場に居合わせる人の相互行為システムの境界を越えると、そこで通用している規則はもはや強要できないし、よしんば空間的移動や時間的保存のできる意味の担架体があったとしても、境界の外でそれに注意が向けられるかどうかはおぼつかない。

(3) 成功のありえなさ：コミュニケーションが受信者に到達し、受信者がある意味を理解したとしても、それを受容するという保証はない。コミュニケーションの成功とは、受信者がコミュニケーションの選択的内容（情報）を自分の行動の前提として受容し、さらなる選択をそれに接続させること、つまり選択の十分な連結である。

この3つのありえなさは、送信者と受信者の間にあって両者の社会関係の成立を不確定的なものにする。送信者は、自分の発した情報が受信者に到達し、受信者がその意味内容を理解し、受容することを予期するが、それはあくまで予期にすぎず、したがって情報は受信者に到達しなかったり、その意味が理解されなかったり（あるいは誤解されたり）、受容されなか

ったりする。つまり、あてはずれが生じる可能性がつねにあるのだ。こうした状況を、ルーマンはコンティンジェンシーという概念で言い表す。そこで、安定した社会関係の成立のためには、コミュニケーションのたびにあてはずれの危険に悩まされることのないよう、コンティンジェンシーを媒介するものが必要となる。それが、コミュニケーション・メディアである [Luhmann, 1976 : pp. 509-511]。メディアは、コミュニケーションの3つのありえなさに対応する。理解のありえなさに対応するのが言語、到達のありえなさに対応するのが普及メディア（それは文書と印刷の発明に始まり、マス・メディアへと発展し、そして（ルーマン自身は述べていないが）現代のニュー・メディアにいたる）、成功のありえなさに対応するのが象徴的に一般化されたメディア（貨幣、権力、愛、真理、さらに宗教的信条、芸術、文明的に標準化された基本的価値）である⁽¹⁸⁾ [Luhmann, 1981 : pp. 28-29] [Luhmann, 1984 : pp. 220-223]。こうしたコミュニケーション・メディアによってはじめて、コミュニケーションは次々に途切れることなく再産出され（つまりコミュニケーションがコミュニケーションを生み）、それと同時にコミュニケーションを構成要素とするオートポイエーシスのシステムとしての社会システムも成立することになるのである。

ところでルーマンは、社会システムの選択様式を構造と過程の2つに区別する。構造とは、そもそもどのような要素と要素間の関係が選択可能なオルターナティブであるかを規定する。それは、時間的には可逆的な選択肢のストックとして機能する。一方、過程は、要素と要素間の関係が時間の流れの中でどのように結合されていくかを規定する。それは、時間的には不可逆的な選択の連鎖である。この場合、一つの選択が次の選択のための前提となって、可能な選択肢の領域を開示する、というかたちで選択が行われる [Luhmann, 1984 : pp. 73-75]。先に、コミュニケーションは選択的事象であると述べたが、これまでの説明が選択様式としてはもっぱら

過程に関するものであることは、もはや明らかであろう。だとしたら、コミュニケーションにおける選択様式としての構造にあたるものは、一体何であろうか。つまり、オートポイエーシスの再産出されるコミュニケーションの連鎖の全体にわたって、あらかじめ可能な選択肢のストックを構成するように複雑性を縮減し、それによってコミュニケーションの連鎖の全体にひとつのまとまりを与えるメカニズムは何であろうか。

そこで出てくるのが、主題 (Themen) と個々の寄与 (Beiträge) という差異である。主題は、コミュニケーションにおいてそもそも語りうることの範囲を規定し (つまり言語によって開かれた意味の無限の複雑性を縮減し)、コミュニケーション過程を一つの意味の連関の中に置く。主題は、自らのもとで可能な個々の寄与を弁別し、さまざまな個々の寄与を短期的ないし長期的な意味連関にまとめあげる。それと同時に主題は、個々の寄与を行う人も調整し、弁別する。つまり主題は、意味の3つの次元である内容次元、時間次元、社会次元⁽¹⁹⁾ にわたるコミュニケーション過程の構造として働き、どのような内容を持った個々の寄与が、いつ、どういう順序で、だれによってなされるべきかをオープンにしておく限りにおいて、一般化の機能をはたすのである [Luhmann, 1984 : pp. 213-21]。(ただしここで、3つの選択の連関からなるコミュニケーションの単位と個々の寄与の単位を混同しないよう、注意すべきであろう。ルーマンははっきり述べていないが、コミュニケーションが送信者と受信者にまたがる単位であるのに対して、個々の寄与は3つの選択のうちの情報にあたるものとして個々の送信者に帰属できるものだから、両者は明らかに異なる単位である。)

ところで、一つの社会システムにおいて可能な主題は、その抽象性、一般性のレベルをどう設定するかにもよるが、一般に一つではない。システムは複数の主題をストックしておき、必要に応じてそのつどの主題を選択する。となると、どのような主題がストックされているかがすでに一つの

選択の結果である。つまり、主題のストックがコミュニケーションのためにより上位の構造を形成していると考えられることができる。このストックを、ルーマンは文化ないしゼマンティーク⁽²⁰⁾と呼ぶ。文化／ゼマンティークは、一方で可能な個々の寄与を無限に生成しうるだけの（内容的、社会的、時間的に）一般化された意味を持ったものでなければならないが、他方でいかなる主題、いかなる個々の寄与が可能かを制限し、判別しなければならない [Luhmann, 1984 : pp. 224-225]。

かくして、オートポイエーシスの再産出の連鎖として生じるコミュニケーションにおいては、連鎖の全体は、文化／ゼマンティークにストックされた主題の構造的選択によってあらかじめ複雑性を縮減され、連鎖の中の個々のコミュニケーションは、先行するコミュニケーションの過程的選択によって複雑性を縮減されることになる。

それにしても、コミュニケーション過程とは一本の線条性のもとに生起するものではないであろう。たとえば、一個のボール（主題）をかわるがわるパスしあう（個々の寄与）ような過程は、きわめて小規模なシステムにおいてのみ可能である。現実には、一つのシステムの中で複数のボールが同時に行き交ったり、一個のボールの行方をめぐって同時にさまざまな（パス以外の）動きが展開されるのが普通である。ルーマン自身は、複雑性の時間化の議論以来、一度としてこの点について明確な議論をしていないが、コミュニケーション過程としての社会過程は、言語が話されたり書かれたりするような線条的な過程（その過程の中では、言語システムの構成要素である音素ないし文字、単語、文章は、順を追ってひとつずつ現れ、統一的な位置関係と範例的な対立・選択関係によって意味を獲得する）というよりも、むしろ通時的な旋律と共時的な和音を持ったオーケストラの演奏の過程に似たものとして生じる、と言うべきであろう⁽²¹⁾。

5. コミュニケーションと行為

これまでの社会学の伝統の中では、複数の人間の相互関係を記述する概念としては、コミュニケーションよりも相互行為の方が一般的であった。これはウェーバー以来の伝統であり、パーソンズの社会システム理論もハーバーマスの批判社会学的社会理論も、行為の概念を出発点にしている。この場合、コミュニケーションは行為の一部分ないし一類型であると考えられることになる。例えばパーソンズは、相互行為過程を、個々の行為者の内面的過程としての意思決定（それは、他の行為者からの情報や環境からのその他の情報を解釈・結合し、自らの決定につなげる過程である）と行為者間の外面的過程としてのコミュニケーション（それは、意思決定を行った行為者が、メディアを用いて他の行為者に情報を伝達する過程である）の2つの部分からなるものであると考えたし [Parsons, 1977 : pp. 173-174]、ハーバーマスは、行為類型を労働行為（それは、人間対自然の関係にもとづくもので、目的合理的、手段的であり、社会システムを構成する要素である）とコミュニケーション行為（それは、人間対人間の関係にもとづくもので、価値合理的、自己充足的で、生活世界を構成する要素である）に区別している [Habermas, 1981]。

かつてはルーマンも、社会システムを構成する最終的な要素は行為である、と述べていた [Luhmann, 1978 : p.100]。しかし今や彼は、社会システムの基底的過程はコミュニケーションである、と述べる [Luhmann, 1984 : p.192]。したがってまた、社会システムの要素的な操作のレベルを特徴づける理論は、行為理論からコミュニケーション理論に移行せねばならない、とも述べる [Luhmann, 1986 : p.174]。前節で概説したコミュニケーション・モデルも、こうした彼の理論的な転換にもなって提出されたものである。

では、行為概念はもはや不要であろうか。もし行為概念とコミュニケーション概念が、複数の人間の相互関係を記述する概念として全く互換的な

ものならば、二つの概念を併記するような理論構成は冗長であり、どちらか一方を任意に選択してよいことになる。だが二つの概念が、複数の人間の相互関係を異なった側面から記述するものならば、両者は相補的なものとして併記されねばならない。また一方が他方を包含するような関係にあるならば（つまり、行為はコミュニケーションを含むがそれ以上の内容を持つ現象であるとか、コミュニケーションは行為の一類型であるという考え方）、その関係を明らかにせねばならない。

この問題に対して、ルーマンはまず、構成と観察という2つの社会システムの成立要件を挙げることから出発する⁽²²⁾。社会システムは、一方で内部過程として、操作的に閉じた構成要素の産出・再産出のネットワークを形成するが、それだけではシステムとしてのアイデンティティを獲得することはできず、もう一方で対外的過程として自己観察・自己記述を行い、システム/環境の差異にもとづく自己規定（複雑性の縮減）を行うことによって、はじめてシステムとしてのアイデンティティを獲得する。前者の過程がシステムの自己構成であり、後者の過程がシステムの自己観察・自己記述である。

社会システムの自己構成の要素がコミュニケーションであることは、前節で述べた通りである。そこで、自己観察・自己記述もコミュニケーションを要素として行われる、というのであれば、話は簡単である。しかしルーマンによれば、次の2つの理由により、自己観察・自己記述においては、コミュニケーションは行為へと縮減されねばならない。

第一の理由は、コミュニケーションよりも行為の方が単純で、認識や取り扱いに適している、ということにある。行為の統一性は、他者の理解を待たずに成立するし、情報と伝達の区別も必要としない。つまり行為に関しては、どのような情報が伝達され、だれがそれを理解するか、ということが問われる必要がなく、したがってコミュニケーションにおける3つの選択というこみいった複雑性を問題にする必要がないのである。行為の統

一性は、単にシステム内で行われている帰属の規則によって、つまり選択の責任を環境ではなくシステムに帰属させることによって獲得される。こうして単純化された行為だけが、システムにおける関係化の結節点として役立つのである。

第二の理由は、行為への縮減が社会関係の時間的な非対称化を容易にする、ということにある。コミュニケーションは複雑な過程なので、理解によって次のコミュニケーションに接続される前に、一定の時間ペンディングになったり、情報や伝達の意味の反芻のために沈黙や躊躇が必要となったりする。つまりコミュニケーションは、持続する現在における出来事であり、その現在の中では選択は可逆的でありうる。これに対して行為は、時点化された現在における出来事であり、不可逆的な選択として次の行為へと接続される⁽²³⁾。こうした時点化と非対称化によってはじめて、システムの構成要素の接続可能性の問題は認識可能になり、コミュニケーションは縮減されて（それが情報としての行為であれ、伝達としての行為であれ）送信者の行為する時点につなぎとめられることになる。コミュニケーションの連鎖が、情報の選択性と理解の選択性を含んで送信者と受信者にオーバーラップし、両者が部分的に相互浸透するような要素から成り立つのに対して、行為の連鎖は、送信者と受信者に関して相互排他的で明確に区切られた要素から成り立つのである。

かくして、社会システムの最終的な構成要素は何か、という問題に対しては、二重の答が出てくることになる。すなわち、社会システムの最終的な構成要素は、一方ではコミュニケーションであり、もう一方ではコミュニケーションの行為としての帰属である、と。社会システムは、内部的な自己構成と対外的な自己観察・自己記述の2つのメカニズムによって成立し、システムとしてのアイデンティティを獲得するが、その2つの過程において、コミュニケーションは社会システムの自己構成のための要素的統一体であり、行為は社会システムの自己観察・自己記述のための要素的統一

一体なのである。

しかしそれにしても、ルーマン自身によるこの社会システムの観察・記述は、一体何なのだろうか。ルーマン自身を、全体社会システムの中で分出してきた社会学と置き換えてもよい。この理論自体が、全体社会システムにとってはひとつの自己観察・自己記述ではないのだろうか。そうだとすれば、コミュニケーションを行為に縮減することなく、むしろその縮減のメカニズム自体を自らの中に含んだこの観察・記述は、理論の中で言われているような行為として縮減された観察・記述とどのような関係にあるのだろうか。

おそらく、この問題に答えるためには、自己言及の問題の全体的解明が必要であろう。したがってここでは答は出さないままにしておくが、この問題に首尾よく答えることによって始めて、コミュニケーションと行為の関係に関するルーマンの説明は、方法論的にも理論的にも妥当性を持つてくる、ということだけは確認しておこう。

6. おわりに

以上が、一般化されたオートポイエーシス原理にもとづいて、コミュニケーションによって社会システムが構成される過程についての、ルーマンの所説の概要である。先にも述べたように、この論文における概説自体が、ルーマンの社会システム理論の読み方の諸可能性からのひとつの選択となっており、しかも理論全体をまるごと説明するというよりは、複数の人間の相互関係の意味的成立のメカニズムはどのようなものか、という問題関心に導かれて、数多くの概念のうちで特定のいくつかのものだけに焦点を合わせたものになっている。

〔図1〕に示された諸概念・諸テーマの連関を思い出してみよう。この論文で主として取り上げたのは、「1. 一般的対象としての社会システム」、「8. 体験と行為」、「9. コミュニケーション」の3つである。図にしたが

えば、オートポイエーシスのシステムの一般原理からコミュニケーションの問題に進むには、ダブル・コンティンジェンシーの問題を経由しなければならないし、行為の問題に進むには、意味の問題を経由しなければならない。また、コミュニケーションのすぐ先にはシステムと環境の問題が待っているし、行為のすぐ先には時間論が待っている。そして、どちらの経路もついには自己言及の問題に到達し、そこからまた元へ戻っている。だからルーマンにしたがって言えば、この論文は、理論構成の迷路の中のほんの一部を、ひとつひとつの脇道にはほとんど目もくれず、手探りで歩いてみたようなものである。

しかし、歩いた部分についてはある程度の説明ができたと思うし、歩いた部分が全体の連関の中でどこに位置するかもだいたい把握できたと思う。それでもなお、この論文の問題関心にもっとよく応えるためには、少なくとも「5. 意味」と「12. 自己言及」に関する検討が欠かせない。また私自身が以前に提示した、行為システムと文化システムの関係枠組という観点から見ると [徳安, 1985], 図の中の項目としては取り上げられていないが、コミュニケーション／相互行為の過程と文化／ゼマンティックとの関係がさらに追及されねばならない。問題関心を少しずらせば、また別の項目の連関も浮かび上がってくるだろう。いずれにしても、ルーマンの全体像の把握への道のりはまだ遠い。

ところで、かつて社会システム理論の主導的パラダイムと目されたパーソンズの理論に対して、その極度の形式性ゆえに包括的な概念図式として分析の語彙を与えてはくれるが、経験的、歴史的現実から離れすぎ、現実へ再び戻る地点を示してくれない、という批判的総括をベルが行った [Bell, 1982: 訳 p. 109]。ベルはまた、社会的現実自体が複雑に錯綜しつつ領域間の乖離を生じている現代社会に対して、単一の全体論的な社会理論として社会システム理論を構築する試みはすべて失敗に終わるだろう、とも述べている [Deutsch et al. (eds.), 1986: pp. 315-316]。ベルは、社

会科学の進歩に対しては、いささか悲観的な懐疑論者である。しかし、パーソンズを超えて前進するためには、ベルの批判と懐疑を克服せねばならない。パーソンズ理論以上の複雑性を持ち、それゆえに地上を分厚く覆った雲の上を飛ぶような抽象レベルにある [Luhmann, 1984 : pp. 11-13] と自認するルーマンの理論は、ベルの批判と懐疑に応えうるであろうか。この問題は、ルーマン理論を検討する際につねに心に留めておかれるべきである。その難解で複雑な理論の迷路の探検が、決して自己目的化しないように。

注

- (1) 行為理論とコミュニケーション理論は、学問領域としては、社会学と社会心理学にそれぞれ対応している。しかし、両者の理論的系譜は全く別というわけではない。少なくとも、ウェーバー以来、社会学で展開されてきた行為理論は、パーソンズの主意主義的行為理論も、ミードに始まる象徴的相互行為論も、シュッツに代表される現象学的社会学も、すべてコミュニケーション理論の系譜の中に含めて考えることができる [McQuail, 1975 : 訳 pp. 43-53]。さらにゴッフマンやガーフィンケルの理論も、同じようにコミュニケーション理論の一変種に含めてよいだろう。
- (2) 行動主義や情報理論が、全く意味の問題に目を向けなかったわけではない。行動主義の中では、オズグッドらに代表される媒介理論が、刺激-反応を媒介する内的過程のモデルの中に意味の概念を位置づけたし [Osgood, 1953]、行動主義の影響を大きく受けた哲学者のモリスは、その記号論の中で行動主義的な用語を用いて記号の意味の問題を考えた [Morris, 1946]。情報理論の立場から意味の問題を考察したものとしては、マッケイの研究がある [Mackey, 1969]。また、行動主義と情報理論をベースにしたシステム理論の中で意味の問題を考察したものとしては、アコフ=エメリーの有目的システムの理論がある [Ackoff & Emery, 1972]。
- (3) 社会システムの概念の発展に関する学説史的な論及としては、[富永, 1984 : pp. 222-256] [富永, 1986 : pp. 166-177] を参照。また特に政治学理論におけるドイツ、イーストンらのシステム概念の研究として、[伊藤, 1987] を参照。
- (4) 日本において、富永健一、吉田民人、小室直樹らによって彫琢された構造

- 一機能理論にも、同様の傾向が見られる。だから、それに対する橋爪・志田・恒松の内在的批判〔橋爪・志田・恒松, 1984〕も、当然のことながら、意味の問題とは離れた地点で行われざるをえない。
- (5) ルーマンが概念の規定や説明の際に、しばしば思想史的、知識社会学的記述をさしはさむのは、このためである。諸概念の意味の歴史の変遷をたどるといふ、彼のゼマンティック研究も、ここから出てくる〔Luhmann, 1980〕。そして彼のゼマンティック論が徹底的に押し進められたならば、彼の理論そのものが歴史的に相対化されることにならざるをえない〔馬場, 1985〕。
- (6) 確かにスタンダードな理論書は、おおむねそうした構成法をとっている。例えば、日本における最新の体系的理論書である富永の『社会学原理』は、個人の行為から出発し、社会システムの構造と機能について述べ、社会システムの変動の問題で章を閉じる〔富永, 1986〕。また、この本で述べられている構造一機能理論の原典とも言うべきパーソンズの *The Social System* も、類似した構成法をとっている〔Parsons, 1951〕。
- (7) この図は原書のままだが、12 から 5 に直接つながる矢印が 2 本出ている点が注意されるべきである。おそらく、一方の矢印が逆向きか、あるいは不要であるかの誤りであろう。
- (8) この問題に関しては、ルーマン自身が詳しく論じている〔Luhmann, 1984 : pp. 488-550〕。また、自己組織性をキー概念として新たな社会理論の構築をめざす今田も、同様の問題を論じている〔今田, 1986 : pp. 18-23, 56-61〕。
- (9) この問題は、言語そのものの線条性に由来するものであり、(3) で述べられた理論構成の直列性とはレベルを異にする。記号論においては、ランガーが論弁的形式／現示的形式という区別を立てて、この問題を古典的に定式化している〔Langer, 1957 : 訳 pp. 96-125〕。連立方程式や化学式のような記号は、現示的形式として、ある程度この問題に 대응するものであろう。
- (10) この段階でのルーマン理論の解説としては、〔青井, 1977〕〔長岡, 1981〕〔山口, 1982〕がすぐれている。これらがいずれもシステム理論や方法論の側面に重点を置いた解説、検討なのに対して、橋爪はルーマンの予期理論を取り上げて、複数の個人の予期からいかにして社会全体の安定した予期構造が形成されるか、という論理を詳細に検討し、それを言語ゲーム論の立場から批判している〔橋爪, 1985 : pp. 160-209〕。しかしこれは、結果としてルーマンを主体理論ないし方法論的個人主義の側に位置づけることとなり、社会システムと心理システムは相互進化の過程で分化してきた〔Luhmann,

1984 : p. 141], と明言する近年のルーマンの理論展開とはそぐわないかたちの批判となっている。

- (11) この現段階のルーマン理論の十分な解説は、まだ行われていない。部分的なものとしては、[長岡, 1985] がある。
- (12) 1960年代に提唱された自己組織システムに限って言えば、ルーマンの指摘は当たっている。しかし、自己組織化(self-organization)という概念を今日なお1960年代的な意味で用いることについては、必ずしも一般的合意は成立していない。むしろ自己組織化という概念は、(オートポイエーシス理論を含めて)自律性、自己運動、秩序形成といった性格を持つ現象一般を指す広範な概念として用いられているように思われる。例えば杉田は、自己組織化に関係する議論として、プリゴジヌの散逸構造理論、ハーケンのシナジェティクス、アイゲンのハイパー・サイクル理論、津田のノイズ・インデュースト・オーダー、ローゼンブラットのパーセプトロン、福島のコグニトロン、ヴァレラやマトゥラーナのオートポイエーシス理論、フェルスターのノイズによる秩序、ノイマンの自己増殖機械、ラングトンの非ノイマン型自己増殖機械、チューリングの形態生成論、ローヴェルの不動点定理、スコットのプログラム意味論、スペンサー＝ブラウンの形の法則、トムのカタストロフ理論、モーガンやアレグザンダーの創発的進化論、ホワイトヘッドの有機体哲学、ウォディントンの発生物学、マンデルブロのフラクタル、ウィナーのサイバネティクスをカタログ風に列挙している[杉田, 1986]。これにケストラーのホロン概念や清水博のバイオ・ホロニクス概念、マルヤマのセカンド・サイバネティクスなどを加えることもできよう。しかし、少なくとも現段階では、こうした諸理論間の異同や相互の関係はあまり明らかにされていない。

また、かつてのベルタランフィの開放システム理論やウィナーのサイバネティクスがそうであったように、ここで挙げた諸理論を社会科学に導入しようとする試みも、いくつか出てきている。ハーケンのシナジェティクス[Haken, 1981][Weidlich & Haag, 1983][高辻, 1980]、プリゴジヌの散逸構造理論[Toffer, 1984][野中, 1986][大澤, 1986]、マルヤマのセカンド・サイバネティクス[Buckley, 1967][北原, 1986][伊藤, 1987]、さらにいくつかを総合的に導入しようとするもの[Jantsch, 1980][Morin, 1977]等々。こうした導入の成果は、まだ定かではない。しかし導入の試みは、安直な比喩や強引な適用に終わる可能性をつねにはらんでいる。そこで今田のように、自己組織性をキー概念としながらも、上記のような試みの成

果には否定的な見解を示し、自省作用による構造変革という考えを中心として構造—機能主義から自省的機能主義への転換を社会学内在的にはかる試みだが、もう一方で出てくることになる〔今田, 1986〕。ルーマン自身のオートポイエーシス理論に対する考えは、以下の本文で述べる通りである。

- (13) ヘイルは、ルーマンが自己維持と自己言及を混同している、と批判している〔Hejl, 1984 : p.64〕。確かにルーマンは、〔図2〕にあるように自己言及—オートポイエーシスのシステムという言い方をしている。しかし、ルーマンの依拠するヴァレラが神経系〔Varela, 1984〕や免疫系〔Vaz & Varela, 1978〕について論じる場合、問題となっているのはヘイルの言う自己維持的でない自己言及システムであるように思われる。ヴァレラの操作的閉鎖性という概念は、それ自体としては構成要素自体の産出と構成要素の状態の産出を区別していないから、むしろオートポイエーシスのシステムは自己言及システムであるとすべきかもしれない（先のヴァレラやマトゥラーナの定義にもかかわらず）。そうなると、ルーマンの用語法自体にはとりあえず問題はなくなる。

しかしルーマンの自己言及概念は、要素レベルでの基底的自己言及、過程レベルでの自己言及としての反省性、システム・レベルでの自己言及としての反省という3つのレベルを区別したり、論理的パラドックスの問題を含んだりするかたちで、ヘイルの定義よりはるかに複雑・難解に定式化されており〔Luhmann, 1984 : pp.593-646〕、それはそれでまとまった検討を要するテーマとなっている。

- (14) ヘイルは、マトゥラーナやヴァレラの高次のオートポイエーシスのシステムという議論に注意を促している。二人は、社会システムがオートポイエーシスのシステム（としての人間）の相互作用の産物ではあるが、それ自体はオートポイエーシスのシステムではない、と明言しているにもかかわらず、高次のオートポイエーシスのシステムという議論を持ち出すことによって、あたかも社会システムがオートポイエーシスのシステムとしての人間を構成要素とする高次のオートポイエーシスのシステムであるかのような解釈を導いている、というわけだ。
- (15) 社会システムの構成要素を、役割や人間といった持続的なものでなく、コミュニケーション（ないし行為）という出来事—それは生成するやいなや消滅する—として規定するにあたっては、オートポイエーシス理論の他に複雑性の時間化というルーマン独特の時間論が前提となっているが〔Luhmann, 1978〕〔Luhmann, 1981 : pp.50-66, 101-125, 126-150〕、ここでは論じる

余裕がない。

- (16) 実は存在論としてもはなはだ不徹底である。電氣的振動も空氣的振動も、そのままでは受信者の手元にも残らない。手元に残すためには、磁気テープの磁気パターンや神経組織の結合パターンのような、保存のきく別のメディアに移しかえられねばならない。そしてその意味でなら、送信者の手元にも同じように残すことができる。これが、情報はコピー可能であるということの意味である。
- (17) 意味概念も非常に難解であるが、ここでは、過剰な可能性をストックしたままで、いずれかの可能性を選択して現実化する様式である、と理解しておこう [Habermas & Luhmann, 1971 : 訳 pp. 38-39] [Luhmann, 1984 : pp. 93-94]。
- (18) 象徴的に一般化されたメディアについての全般的議論としては、[Habermas & Luhmann, 1971 : 訳 pp. 426-442] [Luhmann, 1975 : pp. 170-192] [Luhmann, 1976] 参照。また個別のメディアに関しては、権力 [Luhmann, 1973] と愛 [Luhmann, 1982b] の議論がある。
- (19) 意味の3つの次元については、[Habermas & Luhmann, 1971 : 訳 pp. 52-64] [Luhmann, 1984 : pp. 111-122] 参照。
- (20) ゼマンティック論に関しては、[Luhmann, 1980] 参照。
- (21) ルーマンと同じくホワイトヘッドの出来事 (event) 概念にもとづいて、パーソンズの行為理論 (!) についてこれと類似したフォーマル・モデルを構成する試みとして、[Fararo, 1976] 参照。
- (22) 以下の論述については、[Luhmann, 1984 : pp. 225-241] [Luhmann, 1986 : pp. 177-192] 参照。
- (23) 持続する現在と時点化された現在については、[Luhmann, 1981 : pp. 131-143] 参照。

文献

Ackoff, Russell L. & Fred E. Emery, 1972, *On Purposeful Systems*, Tavistock Publications

青井秀夫, 1977, 「ニクラス・ルーマンの「機能的システム理論」について」, 岡田与好・広中俊雄・樋口陽一 (編) 『社会科学と諸思想の展開—世良教授還暦記念—』 創文社 : pp. 173-250

馬場靖雄, 1985, 「歴史化されたシステム理論—N. ルーマンの全体的理解のために—」, 『ソシオロジ』 97号 : pp. 3-19

- Bell, Daniel, 1982, *The Social Sciences since the Second World War*, Transaction Books=1984, 蟻山昌一訳 『社会科学の現在』 TBS ブリタニカ
- Berger, Peter L. & Thomas Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Doubleday & Company=1977, 山口節郎訳 『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』 新曜社
- Buckley, Walter, 1967, *Sociology and Modern Systems Theory*, Prentice-Hall, Inc.=1980, 新睦人・中野秀一郎訳 『一般社会システム論』 誠信書房
- Deutsch, Karl W., Andrei S. Markovits & John Platt, 1986, *Advances in the Social Sciences, 1900-1980: What, Who, Where, How?*, University Press of America
- Duncan, Hugh Dalziel, 1968, *Symbols in Society*, Oxford University Press, Inc.=1980, 中野秀一郎・柏岡富英訳 『シンボルと社会』 木鐸社
- Fararo, Thomas J., 1976, "On the Foundations of the Theory of Action in Whitehead and Parsons", in Jan J. Loubser et al. (eds.) *Explorations in General Theory in Social Science: Essays in Honor of Talcott Parsons*, vol. 1, The Free Press : pp. 90-122
- Habermas, Jürgen, 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, 2Bde., Suhrkamp Verlag=1985, 河上倫逸・M. フーブリヒト・平井俊彦訳 『コミュニケーション的行為の理論 (上)』 /1986, 岩倉正博・藤澤賢一郎・徳永恂・平野嘉彦・山口節郎訳 『コミュニケーション的行為の理論 (中)』 未来社
- Habermas, Jürgen & Niklas Luhmann, 1971, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie—Was leistet die Systemforschung?*, Suhrkamp Verlag =1984/1987, 佐藤嘉一・山口節郎・藤澤賢一郎訳 『批判理論と社会システム理論』 木鐸社
- Haken, Hermann, 1981, *Erfolgsgeheimnisse der Natur: Synergetik, die Lehre vom Zusammenwirken*, 2Aufl., Deutsche Verlag-Anstalt GmbH=1985, 高木隆司訳 『自然の造形と社会の秩序』 東海大学出版会
- 橋爪大三郎, 1985, 『言語ゲームと社会理論—ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』 勁草書房
- 橋爪大三郎・志田基与師・恒松直幸, 1984, 「危機に立つ構造—機能主義—わが国における展開とその問題点」, 『社会学評論』第35巻, 第1号 : pp. 2-18
- Hejl, Peter M., 1984, "Towards a Theory of Social Systems: Self-

- Organization and Self-Maintenance, Self-Reference and Syn-Reference”, in Hans Ulrich & Gilbert J.B. Probst (eds.) *Self-Organization and Management of Social Systems*, Springer-Verlag : pp. 60-78
- 今田高俊, 1986, 『自己組織性』 創文社
- 伊藤重行, 1987, 『システム ポリティックス』 勁草書房
- Jantsch, Erich, 1980, *The Self-Organizing Universe: Scientific and Human Implications of the Emerging Paradigm of Evolution*, Pergamon Press Ltd. =1986, 芹沢高志・内田恵美訳 『自己組織化する宇宙』 工作舎
- 北原貞輔, 1986, 『システム科学入門』 有斐閣
- Langer, Susanne K., 1957, *Philosophy in a New Key, A Study in the Symbolism of Reason, Rite, and Art*, Harvard University Press =1960, 矢野萬里・池上保太・貴志謙二・近藤洋逸訳 『シンボルの哲学』 岩波書店
- Luhmann, Niklas, 1973, *Macht*, Ferdinand Enke Verlag =1986, 長岡克行訳 『権力』 勁草書房
- Luhmann, Niklas, 1975, *Soziologische Aufklärung 2*, Westdeutscher Verlag = 1986, 土方昭監訳 『社会システムと時間論』 新泉社 (部分訳)
- Luhmann, Niklas, 1976, “Generalized Media and the Problem of Contingency”, in Jan J. Loubser et al. (eds.) *Explorations in General Theory in Social Science: Essays in Honor of Talcott Parsons*, vol. 2, The Free Press : pp. 507-532
- Luhmann, Niklas, 1978, “Temporalization of Complexity”, in Felix Geyer & Johannes van der Zouwen (eds.) *Sociocybernetics: An Actor-oriented Social Systems Approach*, vol. 2, Martinus Nijhoff Social Science Division : pp. 95-111
- Luhmann, Niklas, 1980, *Gesellschaftsstruktur und Semantik: Studien zur Wissenssoziologie der modernen Gesellschaft*, 2Bde., Suhrkamp Verlag = 1985, 佐藤勉訳 『社会システム理論の視座』 木鐸社 (部分訳)
- Luhmann, Niklas, 1981, *Soziologische Aufklärung 3*, Westdeutscher Verlag
- Luhmann, Niklas, 1982a, “Autopoiesis, Handlung und kommunikative Verständigung”, *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 11, Heft4 : pp. 366-379
- Luhmann, Niklas, 1982b, *Liebe als Passion: Zur Codierung von Intimität*, Suhrkamp Verlag
- Luhmann, Niklas, 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeine Theorie*,

Suhrkamp Verlag

Luhmann, Niklas, 1986, "The Autopoiesis of Social Systems", in Felix Geyer & Johannes van der Zouwen (eds.) *Sociocybernetic Paradoxes: Observation, Control and Evolution of Self-steering Systems*, Sage Publications Ltd.: pp. 172-192

Mackey, Donald, 1969, *Information, Mechanism and Meaning*, The M. I. T. Press

Maturana, Humberto, 1981, "Autopoiesis", in Milan Zeleny (ed.) *Autopoiesis: A Theory of Living Organization*, North Holland: pp. 21-30

McQuail, Denis, 1975, *Communication*, Longman Group Ltd. =1979, 山中正剛監訳 『コミュニケーションの社会学』 川島書店

Morin, Edgar, 1977, *La Méthode 1. La Nature de la Nature*, Édition du Seuil =1984, 大津真作訳 『方法1. 自然の自然』 法政大学出版局

Morris, Charles, 1946, *Sign, Language and Behavior*, Prentice-Hall, Inc.

長岡克行, 1981, 「社会理論としての社会システム理論とハーバマス＝ルーマン論争」, 『思想』 第680号: pp. 1-36

長岡克行, 1985, 「社会システムの自己生産と構造—ルーマンの構造変動論」, 『エピステーメー』 II—1号: pp. 296-321

野中郁次郎, 1986, 「組織秩序の解体と創造—自己組織化パラダイムの提言—」, 『組織科学』 vol. 20, no. 1: pp. 32-44

大澤真幸, 1986, 「身体の微視政治技術論」, 『現代思想』 vol. 14-14: pp. 132-143

Osgood, Charles E., 1953, *Method and Theory in Experimental Psychology*, Wiley

Parsons, Talcott, 1951, *The Social System*, The Free Press =1974, 佐藤勉訳 『社会体系論』 青木書店

Parsons, Talcott, 1977, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, The Free Press

杉田 敦, 1986, 「S. O. [self-organization] 型録—拡散する〈自己組織化〉研究からのサンプリング」, 『AI ジャーナル』 no. 4: pp. 56-63

高辻正基, 1980, 『協力現象とはなにか——〈1+1=3〉を可能にする発想』 講談社

Toffler, Alvin, 1984, "Science and Change", in Ilya Prigogine & Isabelle Stengers, *Order out of Chaos: Man's New Dialogue with Nature*, Bantam Books: pp. xi-xxvi =1987, 伏見康治 伏見謙・松枝秀明訳 『混沌からの

秩序』 みすず書店

徳安 彰, 1985, 「行為における“意味”と文化システム」, 『思想』 第 730 号 : pp. 301-315

富永健一, 1984, 『現代の社会学者』 講談社

富永健一, 1986, 『社会学原理』 岩波書店

Varela, Francisco J., 1984, “Two Principles for Self-Organization”, in Hans Ulrich & Gilbert J. B. Probst (eds.) *Self-Organization and Management of Social Systems*, Springer-Verlag : pp. 25-32

Varela, Francisco J., Humberto Maturana & R. B. Uribe, 1974, “Autopoiesis : The Organization of Living Systems, Its Characterization and a Model”, *Biosystems* 5 : pp. 187-196

Vaz, N. M. & Francisco J. Varela, 1978, “Self and Non-sense : An Organism-centered Approach to Immunology”, *Medical Hypotheses* 4=1984, 小泉俊三訳 「自己と無意味—免疫学への生体中心の—アプローチ」, 『現代思想』 vol. 12-14 : pp. 166-188

Weidlich, Wolfgang & Günter Haag, 1983, *Concepts and Models of a Quantitative Sociology : The Dynamics of Interacting Populations*, Springer-Verlag=1986, 寺本英・中島久男・重定南奈子訳 『社会学の数学モデル』 東海大学出版会

山口節郎, 1982, 『社会と意味』 勁草書房